

会 議 録

会 議 の 名 称	令和4年度第1回弘前市文化財審議委員会議
開 催 年 月 日	令和4年7月9日（土）
開 始 ・ 終 了 時 刻	午後14時00分から午後2時45分まで
開 催 場 所	岩木庁舎2階会議室3
議 長 等 の 氏 名	委員長 福井敏隆
出 席 者	委員長 福井敏隆 委員 岩瀬直樹 委員 岡田俊治 委員 山田厳子 委員 関根達人 委員 内山淳一 委員 小松勇 委員 瀧本壽史
欠 席 者	なし
事 務 局 職 員 の 職 氏 名	文化財課長 石岡博之 同課長補佐 小石川透 同課文化財保護係長 村上真知子 同課埋蔵文化財係長 蔦川貴祥 同課主査 棟方隆仁
会 議 の 議 題	（1）文化財指定の候補について 1）砂沢遺跡採集の土偶 2）湯口長根遺跡出土のヒスイ大珠 （2）令和3年度弘前市の文化財保護行政について
会 議 結 果	別添議事録のとおり
会 議 資 料 の 名 称	弘前市文化財指定申請の調査報告書（砂沢遺跡採集の土偶） 同 （湯口長根遺跡出土のヒスイ大珠） 令和4年度弘前市の文化財保護行政について

<p>会議内容 ( 発言者、 発言内容、 審議経過、 結論等 )</p>	<p>別添議事録のとおり</p>
--	------------------

【会議内容要旨】

議題（1-1）「砂沢遺跡採集の土偶」について調査報告

関根委員 文化財の種類有形文化財考古資料、名称「砂沢遺跡採集土偶 1点」、時代弥生時代前期、大きさ高さ20.1センチ、幅16.7センチ、厚さ4.8センチ。

この土偶の上半身、写真及び実物でご確認いただけるかと思いますが、一番くびれている腰の部分で上下二つに割れております。

腰から上、上半身は平成12年8月、弘前市内の小学生により砂沢溜池の南岸で採集され、寄託資料として藤田記念庭園の考古館で展示公開されていた。砂沢遺跡へ遠足に行った小学生が拾って考古館の方に展示公開していたというもの。

下半身は、平成21年10月17日、私が砂沢溜池の南岸から北に向けてはり出した半島部の西岸で採集した。この採集地点は昭和59年から62年度に弘前市教育委員会よって行われた発掘調査区の南西で調査報告書に掲載されたグリッド配置図では15区付近に相当する。見つけたときは土偶の下半身は倒立状態で埋まっていた。上半身がないかと思って探したが見つからなかった。その後、上半身と思われる遺物が『青森県史 考古資料編2』に載っていたことを思い出し、実際に試してみたところ合わさった。

構造及び形式。本土偶は中実で、遮光器土偶なんかは中空と言って中は空洞だが、この土偶は中まで粘土がつまっている中実であり、安定的に自立します。頭部と顔面の一部に欠損があるが、いずれも割れ口は新しいので、ごく最近まで完形だったと思われる。表面採集資料でもあることから、遺棄ないし廃棄されるまで、完全な形態を保っていた可能性が極めて高いと考えられる。

本土偶の体部は平板で、頭部と下半身は立体的である。頭頂部と両腕、両足首から先を除いて、ほぼ全面に刺突がみられる。なで肩で、上半身は逆三角形、腰は細く括れ、腰の下が強く張っております。頭部は左右に冠状突起が付き、左右に垂れ下がる髪が表現されております。耳の位置には、耳飾りと思われる貫通孔のある円形の小突起がみられる。

耳飾りがついており、肩部には肩パット状の小突起、両腕の付け根は盛り上がっています。腕は短く下方に垂下する。体部前面には小さな突起で乳房とへそが表現され、両腕の付け根から乳房に向かい横J字状の隆帯が貼付されている。へその左右には二条の平行沈線が施されている。背面は、中央に縦線の下に円を配置し、そこから左右の両肩と両腋にむけ二条の平行沈線を施す。腰部と両足首には、二条の平行沈線が一周する。足は楕円形で扁平。

次に指定に値する特色および理由について。本土偶は縄文晩期終末に東北で盛行する結髪型土偶と刺突文土偶の融合型であり時期的には弥生時代前期の砂沢式期に位置づけられ砂沢式土器分布圏内に特有の土偶といえます。数少ない弥生土偶の中でも本土偶は最も大きく、作りも丁寧に考古学的にも美術的にも重要な資料です。

土偶は呪術や儀礼の際に故意に破壊したとの説が唱えられるほど、頭部から脚部まで揃った形で出土することはまれです。完全な形で遺棄・廃棄された本土偶は土偶破壊説への反証としても重要と考えられる。

この砂沢遺跡は日本最北の弥生時代の水田が発見された遺跡ということで、考古学の世界では知らない人はいない非常に有名な遺跡であります。

本来、史跡に指定されるべき遺跡であります。遺跡自体が溜池の中にある遺跡の水田の跡は年間ほとんど溜池の下に沈んでいるということもあって史跡にはなっていない。しかし、この昭和59年から62年の弘前市の調査で出土した遺物のうち主要なものは重要文化財に指定されている。

重要文化財に指定されているものの中には土偶もありますが、いずれも破片でこれほど完形のものはない。表面採集資料ではありますけどもルーツが明らかであるということと、砂沢式土器の標識サイトである砂沢遺跡で発見されたということもこの土偶の価値を高めているかという風に思う。

## 議題（1-2）「湯口長根のヒスイ大珠」について調査報告

関根委員

有形文化財候補資料「湯口長根遺跡出土のヒスイ大珠」2点。

時代あるいは年代は縄文時代中期中葉から中期末葉。大きさは大きい方が①長さ54mm、幅38mm、厚さ38mm（重さ197.4g）、小さい方は②長さ38mm、幅37mm、厚さ28mm（重さ74.7g）

この2点は、昭和56年5月28日に、溝江英二氏（故人）さんが、旧相馬村の湯口長根遺跡で発見された。発見された場所はもう一つの資料に地図があるが、湯口長根遺跡は図1の388番の遺跡の上側北の方に×がついている場所が発見された場所になります。

発見者である溝江氏の姉・小山内氏から管理の委託を受けていた、当時、弘前市文化財審議委員であった澤田健雄氏の依頼で、弘前市は平成21年3

月 31 日付けで預かり証を発行し、市の施設で保管していたが、平成 29 年 3 月 17 日、小山内氏から弘前市に正式に寄贈された。現在は弘前市の所蔵で、通常は樹木の埋蔵文化財整理保管施設に所蔵している。

それでは構造及び形式です。併せて別添の資料 2、図の 3 でヒスイ 2 点の実測図と写真がございますので、それをご覧ください。

ヒスイの玉は大小 2 点あり、大きい方は透明感のある美しい翡翠色で、長さ 54mm、幅 38mm、厚さ 38mm の不定形で、重さは 197.4g である。全面平滑に磨き上げられ滑石のような光沢がある。穿孔面は両面ともに平坦で、孔の直径は、小さい平坦面側が約 9mm であるのに対し、大きい平坦面側では約 7mm である。小さい方は、灰緑色で、全体に貫入が多く入っている。大きさは長さ 38mm、幅 37mm、厚さ 28mm の円塊状で、重さは 74.7g である。孔の直径は両端とも約 7mm である。どちらも、緒締型の厚手型に分類される。

指定に値する特色及び理由ですが、湯口長根遺跡から出土した 2 点のヒスイ大珠は、縄文中期中葉から末葉に青森県域で盛行した円盤・扁球・球状の「三内丸山型」と呼ばれるタイプのヒスイである。注目すべきは、2 個が一緒に出土した点である。

二つは一連の首飾りを構成していた可能性が高いと思われます。稀少なヒスイ大珠を複数連ねた例は、黒石市の一ノ渡遺跡、それから六ヶ所村上尾駮(2)遺跡、岩手県二戸市大向上平遺跡でも確認されている。

一ノ渡遺跡例は別添の資料の図の 4 に実測図があります。こちらは県内最大級のヒスイ大珠 2 点になります。それから上尾駮(2)遺跡は図の 5 に出ています。上尾駮(2)遺跡例は 4 点ものヒスイ大珠が組み合う。表は出土状況の 4 つまとまって出てきたときの写真で、裏は 1 点 1 点の実測図。

大向上平遺跡例は 2 個のアマオブネガイの殻口部同士を合わせ一対として連ねたものとヒスイ大珠 2 点が組み合う。大向上平のものは図の 6 に載っていますが、1 の土器の中に 2, 3, 4, 5, 6 が入っていました。アマオブネガイは小さな半卵形の巻貝で、日本近海では、日本海側が山口県以南、太平洋側では房総半島以南に生息する。要するに南海産の貝で、図には 1 点しか出ていないが沢山の貝が出てこの土器の中にある。

遠隔地からもたらされた糸魚川産のヒスイの大珠。ヒスイというのは日本では新潟県の糸魚川水系、姫川流域でしかとれないものであり、これが全国的に流通している、つまりヒスイは新潟産のものである。それから二戸の例では、貝は南海産の貝、いずれも遠隔地のものを組み合わせた、非常に稀有性に富んだ特別な装身具といえる。

以上が複数ヒスイ大珠を組み合わせている例で、湯口長根遺跡から出土したヒスイ大珠は、まさに威信財と呼ぶにふさわしい特別な装身具である。このヒスイ大珠が作られた時代は環状配石墓・再葬土器棺墓・組石石棺墓・環状列石などの祭祀遺構とともに、中期後半から後期前葉にかけ津軽海峡周辺域の縄文社会が複雑化したことを物語る資料として、弘前市の有形文化財（考古資料）に指定するにふさわしいと結論づけられると考えられる。

ご存じのように三内丸山遺跡が作られた時代、縄文の社会、特にこの津軽海峡の縄文社会はかなり複雑化した社会を作っていたのではないか、このように遠隔地のものを複数組み合わせで作られた威信財を身に着けられるような人がいたということ。そういった社会を考える上でこの湯口長根遺跡のヒスイ大珠は非常に重要な資料である、また見た目も非常に美しいということもあり、歴史的考古学的な価値と美術的な価値と両方持っているものだというふうに考えている。

福井委員長       では、委員の皆さまから意見を頂戴します。

瀧本委員         指定には賛成。歴史的にも考古学的にも話題性のあるものと思う。

山田委員         最近はいろいろな博物館で土偶がキャラクター化して人気を博している。砂沢の土偶を是非積極的にアピールしてほしい。子どもが喜びそうである。県・国の指定は考えられるものか。

関根委員         発掘された土器は重要文化財となっているので、追加指定もしくは附のような形で持っていければ。その価値は十分にある。

内山委員         完形品ということで、肩代わりとしての土偶ではない新たな歴史的解釈にも大いに貢献できる貴重な資料であると思う。

ヒスイは、2個同じ場所から出てきたということであるが、本来は複数組み合わせたり、貝殻とセットになっていたという想定がされるか。

関根委員         それが不明である。単独で出てくるものが多く、複数で出土する例は稀である。大珠ではなく小さいヒスイであれば連なって出てくることもある。大珠は一つでも出てくれば十分な価値を持つものです。

岡田委員         砂沢の土偶の黒く焦げているような部分は何か。

関根委員           これは黒斑といい、野焼きした土器などを熱いうちに動かそうとして木のようなもので挟んだりする。その時触れた部分に黒斑ができる。

小松委員           呪術儀礼の際に故意に破壊するという肩代わりに使ったという説があるが、それとは真逆の意味を持った出土品である。それと、腰から下の部分には縄文時代をとおして共通のデザインがあるように思うが。

関根委員           肩代わりの説は確かに一般に言われているものである。しかし、一方で天然アスファルトをつかって土偶を修復した例もみられる。数は少ないが今回の土偶のように完形品もあるわけでそういう意味でも価値はある。

                        デザインの件だが、土偶の本質は妊婦であるというところであり、足は最後に登場しているため、そこまで重要視はされていないのではないかと考える。

                        弥生時代になると土偶は急激に減っていくのであるが、この砂沢遺跡は弥生の水田遺跡であるが、遺物などからは心は縄文の人々の暮らしを感じることができる。

小松委員           大珠は穴が精巧に開けられていて驚いている。

関根委員           金属などのドリルがない時代であり、研磨剤をはさんで鳥の骨で少しずつ削っていたと考えられる。

                        例えば、鏃などでも動物を獲るためであればあれほどきれいに磨く必要はない。弥生人であれば生産規模の拡大を目指して田んぼを広げるのだと思うが、縄文人は美術工芸とでもいえるほど美しいものを作ることに手間を惜しまない。今の時代に見直されるべき価値観かなと思う。

福井委員長       指定に関しては両資料とも異存はないということでよろしいか。  
                        今回は答申を行いたいので事務局には資料の整理をお願いする。

## 議題（２）令和3年度弘前市の文化財保護行政について

事務局より説明

### その他

内山委員           昨年度指定となった「返魂香之図」について令和4年8月の『国華』に報告が掲載されることになったのでお知らせする。

福井委員長       今回の任期を以て退任したい。これからは、指定だけではなく活用・周

知という面でも皆さんに力を発揮してほしい。これまでのご助力に感謝する。

以 上